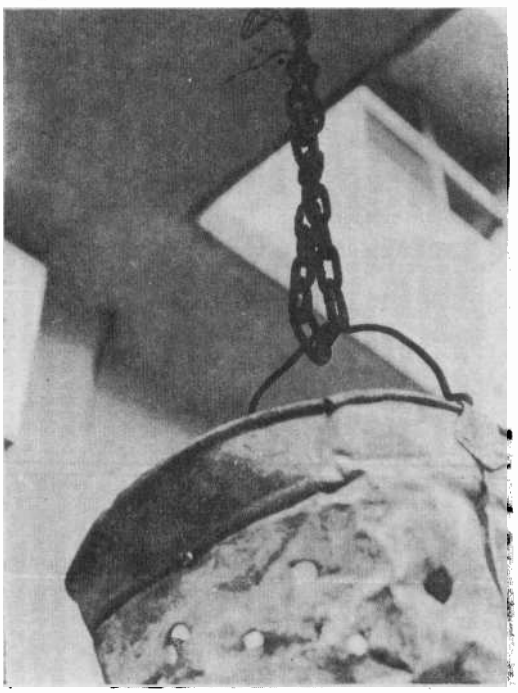
●教授会を追放せよ！
●全ての斗う学友は
全共闘に結集せよ！
●全国学園斗争勝利！
●70年安保粉砕！

バリケード

4月1日（火曜）
第4号
1部　20円
京都府立医大全学共闘会議
情宣局発行

3.21 ファッショ的弾圧をはねのけ
22 斗かう砦を構築せよ！



全ゆる既存権力との全面的な対決を!!

全教授を追放せよ！

もっとも鋭く権力に迫るものはもっとも手ひどい弾圧を受ける。ファッショ的弾圧、それはまさにファッショ府政下におけるファッショ的弾圧であった。二年にわたる蟻川「民主」府政は、ついにその本質を暴露した。

二十一、二十二日の両日、国家権力特製の暴力装置である機動隊が府立医大を襲い、四十七名の学友を不当逮捕し、その直後「ファッショ大学」当局は数ケ月間の大学閉鎖を「告示」した。我々は「告示」という教授会権力による一方的な我々への対応の仕方、そして我々の大学内存在の在り方に対して永続的な異議申し立てを行なうべく無期限スト、本部・分校封鎖を勝ち取ってきたのではなかったか。権力側はいまもって「告示」という一枚の紙切れで我々を圧殺できると思っている。

学友諸君！

教授会に対する一切の幻想を捨てよ！

彼ら権力者の言う「対話」とは、「告示する」ことによって我々を国家権力に売り渡すことに他ならない。

大衆団交は「対話」の場ではない。それは抑圧されたものが「告示」をはねのけ、我々の斗かう論理で支配権力をつき崩し、学内に二重権力を創出せしめることによりはじめて意味を持ち得るのだ。我々の六項目要求はいまなお正当である。そして我々の斗かいが全面的な正性を持つが故に支配者は全面的な斗争圧殺を企だてている。

学友諸君！

我々の明確な論理に対していまだに「一部の暴力学生による煽動は許せない」としか答えられない蟻川の飼犬＝教授会を今すぐ医大から追放せよ！

府職労＝日共を粉砕せよ！

機動隊に踏みにじられた学内はいま、府職労＝日共が学内機動隊の役目をもってじゅうりんしている。我々が斗争に入る以前から彼ら反革命分子は「青年行動隊」を結成し、我々の斗争の質とは無関係に「トロッキストは医大から出てゆけ」というバカのひとつ憶えなうべく無期限スト、本部・分校封鎖を勝ち取ってきたのではなかったか。権力側はいまもって「告示」という一枚の紙切れで我々を圧殺できると思っている。

学友諸君！

教授会に対する一切の幻想を捨てよ！

彼ら権力者の言う「対話」とは、「告示する」ことによって我々を国家権力に売り渡すことに他ならない。

大衆団交は「対話」の場ではない。それは抑圧されたものが「告示」をはねのけ、我々の斗かう論理で支配権力をつき崩し、学内に二重権力を創出せしめることによりはじめて意味を持ち得るのだ。我々の六項目要求はいまなお正当である。そして我々の斗かいが全面的な正性を持つが故に支配者は全面的な斗争圧殺を企だてている。

学友諸君！

我々の明確な論理に対していまだに「一部の暴力学生による煽動は許せない」としか答えられない蟻川の飼犬＝教授会を今すぐ医大から追放せよ！

蟻川・国家権力を打倒する斗かいの砦を奪還せよ！

一〇〇〇名におよぶ機動隊導入と学内捜査を、教授会は三月十五日にすでに決定し、事前に府警と連絡をとりつつ行なった。国家権力の手先となった"面通し"であり、のら犬は大学から追放しなければならない。」と叫び、我々の斗争圧殺に対し「機動隊はよくやった」としか言えない蟻川は、もはや「民主」でも「革新」でもない。彼は権力を握ったもの特有の腐臭を放つ一個の化物にすぎない。そしてその彼を支えている府職労＝日共および府官僚体制はすべからく国家権力の補完物でしかあり得ない。

学友諸君！

日本帝国主義は今や七〇年安保に向けて怒濤の攻勢をかけてきている。六九年度政府予算案は「財政硬直化是正」を唱えながらも、ついに大型化を余儀なくされてしまった。そのことの意味は、七〇年代階級斗争をいかに乗り切るか、という体制そのものにとっての死活の問題を孕んでいる、ということができる。公共料金の値上げは、国鉄を除けばほとんどなされないし、健保抜本改悪も七一年に延期されている。このように政府ブルジョアジーは一方において、この旨を大学側に申し入れたが府階級間対立を緩和することに専念し、他方、休制に打撃を加えるものに対しては、中教審答申にみられる如く徹底した弾圧を行なおうとしている。

学友諸君！

東大・日大斗争をはじめとする全国学園斗争と堅く連帯し、この七〇年に向けての政府ブルジョアジーの攻勢を粉砕せよ！

斗かう砦を奪還せよ！　昨日までの本館バリケードを自己の内部に再構築し、国家権力・反革命に対する砦とせよ！

全国の闘う労働者、学生諸君！　弾圧の魔手＝蟻川ファッショ体制を打倒し、府立医大闘争、全国学園闘争勝利に向って鉄の進撃を開始せよ。

恐怖政治の時代が到来した。忍びよる暗黒の時代がすべての学友が国家権力に売りわたされていった。"自由・"という言葉がこれほど白々しく響く時代はないであろう。しかし、京府医大全共闘は絶対に敗北しない。ジュラルミンの盾を、帝国主義の壁を全人民の武装蜂起でもって突破するまで我々は自ら築いた解放の砦を死守することを宣言する。

独裁者蟻川の直接指揮下の、三月二十一日から二十二日にかけて国家権力機動隊の弾圧の渦中にあった我々は、四十七名にわたる大量不当逮捕者と七名の逮捕令状者を出し、完全ロックアウトをくらったにもかかわらず、今、再度の闘争体制を組み、反撃に転ずる作業をおこない、大学を奪還することを決意している。府医大の闘う医学生、青年医師、無給医、看護婦、労働者諸君、そして全国の闘う労働者、学生諸君、すべての怒りをバリケード構築に転化せよ。そして、反動の権化＝蟻川を打倒せよ。

アピール

一切の妥協を排し鉄の進撃を！

府立医大に於ける闘争は出発点において個別学園闘争としての自然発生性を内包していた。それは現在に至るまでの大学行政に対する教授会独裁体制と失政、また設置者としての独裁的な蟻川の大学行政に対する無方針、弾圧策動が全学生、青医連の怒りとなって爆発したものであった。そして、闘争が教授会権力と無権利状態の学生、青医連の熾烈な闘いと発展するに及んで、我々がもはや学内に学生権力の樹立をバリケード封鎖闘争で勝ち取っていかないかぎり、権力側に対して攻撃をおこなうことができず、同時に学内における二重権力状況から大学コミューンを展望していかないかぎり府医大闘争の勝利はありえないことを確認した。

ブルジョワ支配休制から訣別し、そして攻撃するためには何ものをもかなぐり捨てるわけにはいかない。それはバリケードによって人民に解放された砦を構築してゆくこと以外になく、そして反帝闘争の拠点として全国学園闘争と結合してゆく過程で七十年安保粉砕から七十年代階級闘争を闘ってゆくことである。又我々の闘いは現代帝国主義に対するきびしい政治的問いかけであった。蟻川を頂点とした日共＝民青（府職労等）はこの闘争にファッショ的に介入し、終始強圧的なデマ宣伝を行うことにより完全な圧殺をはかってきた。そして、二十一日、二十二日に一挙的に彼らのブルジョワ権力集団としての実態が暴露されたのである。

蟻川が「京都府下から反代々木を絶対に追放する」と豪語した背景には自らの部下としての官僚と労組幹部が一体となって政治的生命をささえているという事実がある。今ほど一思想表現の自由」が幻想でしかなく、法とは所詮支配者のものでしかない、仮面が脱がされ彼らの実態が露呈した時、我々はもはや退路をたたれざるをえない。全戦線を強化せよ。戦闘的労働者、学生は府医大闘争に結集し、日共産党＝民青（蟻川路線）を根底から粉砕するなかで全国学園共闘を展望せよ。

京府医大全学共闘会議

3.25 抗議行動に学友三百名決起

3・21・3・22の延べ千名余りのあのファッショ的な武装機動隊による学内制圧、及びこれを側面的に援助した府職労＝蟻川（日共＝民青）、そして学生を国家権力に売り渡すことによって、学生・青医連の要求している大衆団交の応えとした教授会の三身一体となった斗争圧殺に対し、全学的に結集した三百名の闘う学生・青年医師・労働者は、自らの心の底からの怒りを、全共斗の旗の下に圧倒的なデモストレーションで物賛化せしめた。

この日に先だち二十四日、全共斗は病院前広場に集会を設定し、午後二時半、デモンストレーションが河原町通りから丸太町通り京大病院まで闘われる中で、自発的にわき起る蟻川エセ民主府政打倒、機動隊導入粉砕等々のシュプレヒコールは、我々があのバリケード封鎖の中で自己の問題意識を討論を通じて、状況としてトータルに再構成する視点の獲得したものとして、そして又それ以上にバリケードの中の生活を実感として学びとった青春の感性、しかも苦々しい感性を内部からえぐり出したものであろう。

京大病院内における総括集会で京大医学部の学友と共に我々は次の事を確認した。

つまり府立医大にかけられた、学生の一割近くも検挙されるという国家権力の直接介入による未曾有の大弾圧は、まさしく全共斗が会を全員府立医大から追放し、完膚なきまで粉砕し尽すことを全学の学生、青医連、無給医、助手、帝国主義段階の一産業部門として再編すべき対象としてのみとらえ、いわゆる健保法改悪によって、より徹底的に大衆収奪を画策し、支配の矛盾を合理化で隠蔽せんとする政府ブルジョアジーにとって恐怖の原因とならざるを得なかったからである。全共斗は必ずロックアウトを実力解除し、再びバリケード封鎖斗争を組織するぞ。この様に高揚した雰囲気の中で再び、デモの隊列がとられ、府立医大・京大の学生、青年医師達は現在バリケード封鎖でもって闘争中の京大Cに向けて出発した。時計台本部までのすべての道程をジグザグ、ウズマキ、フランスの無屈けデモを貫徹する中で、交通警官はその激しさに圧倒され全然手がでない状況を現出せしめた。

時計台広場の再度の総括集会において府立医大斗争がその個別闘争の枠を払拭し、正に東大、日大を頂点とする全国学園闘争の持つ意味と等しいものである認識の故、医学連絡体として、京大全共斗と連帯して闘う中で府立医大奪還闘争が展望されなければならないという決意表明が述べられた。

権力は最も弱小部隊に対しては最も熾烈な弾圧をかけてくる。今度の大弾圧は、我々の斗争がもはや医学部独自の斗争だけではなくより普遍的な質を有する政治斗争であるという風に位置付ける必要性を示している。

提起した医局解体そして要求六項目に深浅な思想を内包し、それを凝縮したものとしての学生、青医連の拒否権という問題が、医療を帝国主義段階の一産業部門として再編すべき対象としてのみとらえ、いわゆる健保法改悪によって、より徹底的に大衆収奪を画策し、支配の矛盾を合理化で隠蔽せんとする政府ブルジョアジーにとって恐怖の原因とならざるを得なかったからである。全共斗は必ずロックアウトを実力解除し、再びバリケード封鎖斗争を組織するぞ。この様に高揚した雰囲気の中で再び、デモの隊列がとられ、府立医大・京大の学生、青年医師達は現在バリケード封鎖でもって闘争中の京大Cに向けて出発した。時計台本部までのすべての道程をジグザグ、ウズマキ、フランスの無屈けデモを貫徹する中で、交通警官はその激しさに圧倒され全然手がでない状況を現出せしめた。

時計台広場の再度の総括集会において府立医大斗争がその個別闘争の枠を払拭し、正に東大、日大を頂点とする全国学園闘争の持つ意味と等しいものである認識の故、医学連絡体として、京大全共斗と連帯して闘う中で府立医大奪還闘争が展望されなければならないという決意表明が述べられた。

権力は最も弱小部隊に対しては最も熾烈な弾圧をかけてくる。今度の大弾圧は、我々の斗争がもはや医学部独自の斗争だけではなくより普遍的な質を有する政治斗争であるという風に位置付ける必要性を示している。

府立医大斗争の本質は何か

過去一貫して医学連動の先頭に立ち、インターン斗争研修協約斗争を斗ってきた我々、京都府立医大学生自治会を中心とする全学共斗会議は教授会を学内から全面的に追放し、全面的に我々の志向する医学医療体系を構築しうる前線へと京府医大を変質させることができるか、あるいは教授会＝日共と一体となった恐怖政治の下に全面的に屈服してしまうのかという地点に立っている。

〈斗争の背景〉

我々はここで過去の諸々の斗争を経験し、到達した現在の斗争を分析し、今後の方針を若干提起したい。過去二十年に渡って続けられたインターン斗争が研修協約斗争へと発展する中で「研修の名による労働収奪反対」というスローガンを獲得し、健保特例法、健保抜本改悪阻止斗争、安保斗争を医学連15回大会の中で提起し、全人民的な政治課題を追求する医学連の一部隊として取り組んできた。

青医連は学部を卒業した青年医師が従来の医局制度を否定し、医師の非政治性を克服し、全ゆる斗争へ介入していく能動的エネルギーを持った組織として生みだされねばならない。東大斗争が全学的な斗争へと発展したのは助手、無給医、大学院生、学生が青医連の手によって口火を切られた政治的市民権の回復と人間の回復を共有すべきものとしてとらえられたからではなかったのか。

京府医大に於いては昨年の研協斗争で獲得できなかった青医連の公認という要求を青医連＝学生の拒否権の獲得を最終的な目標として教授会に要求してきた。問題はその他、教養カリキュラム、臨床研究棟建築問題等蓄積された学内諸問題があった。拒否権とは一般的に言われる教授会決定の差し戻し権の獲得にとどまるものではなく、明確に青年医師＝学生の権力の樹立を目的とするものであり、それ故に、教授会公開を前提としし拒否権の行使しうる範囲は人事、予算決算、カリキュラム等全面的なものでなければならない。

〈〝革新〟府政下における大学〉

京都府においては日共社会党に推された蜷川知事の独裁体制が20年に至ろうとしている。現在の国内状況の中で、〝革新〟自治とは一体どういう意味を持つのか。予算・治安の大部分を中央集権的に政府＝自民党に奪われ、何ら自治体として機能しえなくなった自治の〝革新〟の役割は、その規制される範囲でなんとかうまくやっていくというのではなく、まさに中央権力への反抗であり、現在の〝革新〟に対する締付けの徹底的な暴露でなければならない。決して、革新首長を守ることが目的とされてはならない。もし選挙で勝つことが第一義として考えるならば、それはもはや〝保守〟である。

京府医大に関しては、東大＝政府自民党の関係と全く酷似した関係が、京府医大＝蜷川・日共の関係に存在している。いや、それ以上の蜷川＝事務局長＝京都府職労という縦の関係が一貫して大学内を制圧している。京都の場合も日共＝府職労幹部は労働者、学生に対してその日常的に潜在する現代の体制に対する不満を根底的なところから把えることを放棄し、全ゆる問題を矮小化し、常に自らが体制の肩代りをして大衆を抑圧するものは拘禁し抑圧するというブルジョワイデオロギーが貫徹しているのである。しかしながら、我々の闘志はいささかもおとろえず、新たな闘いへの意欲がこみあげてくるのを覚える。我々の闘争はいかなる弾圧にも屈しない。

我々の固いスクラムに恐怖した教授会は自らの教え子を国家権力に売り渡し、数カ月にわたる大学閉鎖をあえて行い、徹底した弾圧を開始した。京府医大にはファシズムの恐怖政治が荒れ狂っている。「大学の自治」、「学問の自由」、「医者の使命」等々の言葉がこれほど空疎にひびく時はない。ブルジョワ社会の法とは所詮支配者以外の何者のものでもなく支配者のルミンの盾、放水車、ガス銃などで完全武装して大学正門を襲撃機動隊が導入され、七名の学友が不当にも逮捕されていく。

府当局、警察当局一体となった斗争圧殺のファッショ的弾圧に抗し、翌朝再び機動隊が導入されるという事態に、全学バリケード封鎖で断固闘う決意を確認した我々は、静かな雪の舞う深夜闘志と緊張を胸に秘めて正門にバリケードを築き機動隊の再来を待った。二十二日未明、我が吉村学長に先導された七百名内外の機動隊がジュラ

40名不当逮捕者から の戦線復帰声明

三月二十一日国家権力の暴力装置機動隊が導入され、七名の学友が不当にも逮捕されていく。

鉄鎖を断て！

置場生活、刑事、検事の洞喝と懐柔の中で、人間らしくあろうとすれば手錠をはめられ、鉄格子におし込められ、理不尽な調書をとられるというブルジョワ社会のしくみを今さらながら思い知らされ、蜷川「革新」府政の実態を身をもって体験した。「民主」府政とは所詮体制の補完物でしかなく、これに敵対するものは拘禁し抑圧するというブルジョワイデオロギーが貫徹しているのである。しかしながら、我々の闘志はいささかもおとろえず、新たな闘いへの意欲がこみあげてくるのを覚える。我々の闘争はいかなる弾圧にも屈しない。

我々の固いスクラムに恐怖した教授会は自らの教え子を国家権力に売り渡し、数カ月にわたる大学閉鎖をあえて行い、徹底した弾圧を開始した。京府医大にはファシズムの恐怖政治が荒れ狂っている。「大学の自治」、「学問の自由」、「医者の使命」等々の言葉がこれほど空疎にひびく時はない。ブルジョワ社会の法とは所詮支配者以外の何者のものでもなく支配者の論理を貫徹し、敵対する部分は徹底して圧殺するという内容が教授会の言う尊敬と信頼であるのである。ブルジョワ法体系と共に大学前河原町通り坐りこみ斗争を行い、十二日朝を迎え、〝記念ホール たてこもり〟が始ったのである。

団交に応ずることにより、必然的に自らの無論理性を暴露されることに恐怖した彼らは、約束の団交に出席せず、助教授講師会、助手副手会を同席させることによって学生の追及をかわそうとし、全学集会を提起した。しかしながら、我々の断固とした決意と勇敢な手、無給医会の中に存在した不満は全学集会の流会、一時的な教授会の孤立化へと進み、教授会はその後彼らは我々の前に一切姿を見せずいたずらにストを長期化させ学生間の分裂を促進させようとした。しかし我々は連日の討論から本館封鎖、医局解体を導き出し、二月二十六日学生大会決定で本館封鎖を宣徹し、その後病院長に対する不当な告発をとりさげ、起訴を許すな!!

(4) 教授会の手による医局改革案粉砕!!

我々はもはや何ものも恐れるものはなくなった。もうこれ以上の弾圧は考えられないから。これ以上、教授会に失望することはないから。

全国の斗う労働者、学生諸君に府立医大全共斗は、今後の大学奪還斗争を斗ううえで、可能なあらゆる連帯を求めるとともに、全国の学園斗争に勝利するまで斗い抜くことを宣言する。

〈学園斗争は何を提起したか〉

一方、東大＝日大を頂点とする学園斗争は七十年を前に拡大つづけている。現代の学問は細分化され、専門化され、研究者自体が自らの行っている研究の位置づけを見失ない、結果として産、軍、官学協同路線を突き進んでいくという内容を必然的に持っている。つまり、自らが研究を探めれば深めるほど、その意志に反して人民に敵対する危険性が大きくなるというジレンマが存在するのである。

学生、青年医師、研究者が自らの大学を、あるいは研究室を封鎖するということはまさに全面的な日常性（支配者のイデオロギーが貫徹されている）の否定であり、新たな学問、研究への第一段階であるということを確認しなければならない。

〈教養ストー→全学ストー→団交へ〉

過去の教授会との種々の話し合いの内容と実行にうつされた内容の根本的改変を要求し、二月三日教養独自でははじめて無期限ストに突入し、全学的な斗争への突破口を切り拓いた。この教養の斗争はそのカリキュラムの全くの無内容さ、前近代的な施設、教官、スタッフの決定的な不足、更に、常に学部教育の教養への移行を意図している医学教育に対する根底からの告発であった。

我々は、二月十日学生大会を開き、教養カリ、青医連公認、学生自治会＝青医連の拒否権の獲得とそれを討議する場としての大衆団交を要求し圧倒的な決議で全学無期限ストに入った。団交は、これまで教授会に全ゆる決定権を奪われ抑圧され続けた部分が対等の権利を求め、自らが決定権を持つという場として理解せねばならず、それを推し進めることにより最終的には拒否権にまでつき進められる内容を有している必要がある。

我々は、二月十日ストに入ると同時に教授会公開の斗いを開始した。その中で、過去の独裁から生れた諸々の問題とりわけ、蜷川府政に対する主体性の欠除とともに教授会の孤立化へと進み、教授会はその場しのぎの行動として団交会場を経た彼らは約束不履行の自己批判のポーズを見せながらも依然として団交を拒否し、自らの権力を温存したままの「大衆団体協議会」なる奇妙なものを提案してきた。機導隊導入はこの時点で検討されており、事務局長が暗躍していたことが判明している。

その後彼らは我々の前に一切姿を見せずいたずらにストを長期化させ学生間の分裂を促進させようとした。しかし我々は連日の討論から本館封鎖、医局解体を導き出し、二月二十六日学生大会決定で本館封鎖を宣徹し、その後病院長に対する不当な告発をとりさげ、起訴を許すな!!

(4) 教授会の手による医局改革案粉砕!!

我々はもはや何ものも恐れるものはなくなった。もうこれ以上の弾圧は考えられないから。これ以上、教授会に失望することはないから。

全国の斗う労働者、学生諸君に府立医大全共斗は、今後の大学奪還斗争を斗ううえで、可能なあらゆる連帯を求めるとともに、全国の学園斗争に勝利するまで斗い抜くことを宣言する。

〈機動隊導入から大学閉鎖へ〉

一方無給医のスト突入など流動化する状況の中で、教授会は学長をはじめとする管理職の信任投票を各教授の主体性のなさにつけ込む形で行い、方針は教授会執行部の独断で出しうるという操作を功の時点で決定し所警と交渉する一方、上智大学へ職員を派遣し、大学閉鎖の方針をうち出していた。そして三月二十一日午後四時、立命館全共斗の卒業式粉砕斗争に対して出動したかのように見せかけた機動隊三百名が突然構内に乱入し、全学生、青年医師を検束し、学生部長、病院長、学生課長の前で面通しを行い逮捕令状により七名を不当逮捕した。

その夜抗議集会を持ち、再度の封鎖を決行し、斗う決意を明らかにした。しかし、二十二日早朝再度機動隊が乱入し、退路を塞いでおいて退去命令を出し、四十名の学友を検挙した。そして学生、青医連、無給医という教授会を批判する部分に対しては学内立入を禁ずるという弾圧策をとった。現在ある府職労さらに学生課の職員と三人一組のパトロールが行われている。

今回の斗争は青医連運動を構築し、医局体制の打破から医学、医療体制を変革し階級斗争を担う部隊を編成しようとする我々と、医局体制の頂点に立つ教授会との対決という非和解的な性格を持っている故、当然機動隊導入もありうるべきものであった。機動隊導入により学内情勢はゆれ動いている。

教授会が大学閉鎖後に出した改革案は無給医の全廃を唱えているが、その内容は、一、診療助手（有個人としての人間性そのものが暴露されていった。極めて無内容な発言を彼らが繰り返すうちに十一日の朝を迎え、団交は一たん打ち切られ、十二日の朝九時から再開するという合意が成立した。そして十一日、京大、立命館全共斗と共に大学前河原町通り坐りこみ斗争を行い、十二日朝を迎え、〝記念ホール たてこもり〟が始ったのである。

団交に応ずることにより、必然的に自らの無論理性を暴露されることに恐怖した彼らは、約束の団交に出席せず、助教授講師会、助手副手会を同席させることによって学生の追及をかわそうとし、全学集会を提起した。しかしながら、我々の断固とした決意と勇敢な手、無給医会の中に存在した不満は全学集会の流会、一時的な教授会の孤立化へと進み、教授会はそれる全ての方針は拒否する。

今回の弾圧によって我々はは っきりと助講会＝学生までの全階層の構成員にいかなる立場をとるかをつきつけ、真に斗う部隊を全共斗の旗の下に結集し、次のスローガンをかかげて新たな斗争態勢をつくりあげるだろう。

(1) 全教授は即時辞任せよ!!

(2) 大学閉鎖を即時解除せよ!!

(3) 学生に対する不当な告発をとりさげ、起訴を許すな!!

(4) 教授会の手による医局改革案粉砕!!

編集後記

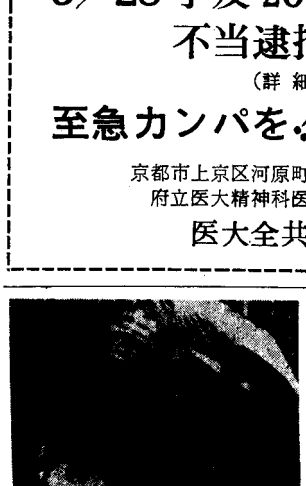
突如たる権力の番犬＝機動隊の乱入により、一層熾烈な闘いの戦端が切り拓かれた。大量の不当逮捕者を出す中で、確かに我々は打撃を受けたが我々は再度、強固な戦列を組み直し、更なる進撃を開始した。機関誌「バリケード」も又、その戦列の一翼として、未熟ながら数人のスタッフでもって、その任務に当ることにし、ここに第四号を出した次第である。ファッショ教授会、京都住血吸虫＝蜷川は、我々の闘いの前に、その本質を暴露された故に、恐怖し、狂気の弾圧を為してきた。だが、我々は闘う全学共闘会議は不滅であり、「バリケード」も又、不滅のものである。敵を撃滅し、勝利の日まで闘い抜くことを表明する。

緊急

三度目の機動隊導入!!
3／28学友20名
不当逮捕さる!!
（詳細は次号）

至急カンパを!!

京都市上京区河原町広小路
府立医大精神科医局内
医大全共闘救対本部



想像力が
権力を奪う

さまざまな 青春が語りだす あなたの書斉

京都書院

中京区四条河原町上ル TEL (221) 1082 (代)